

農園便り 9月号 (128号)

2023/9/1

文責 筒口 典康

8月の、「関町南3丁目区民農園」、33区の最近の様子



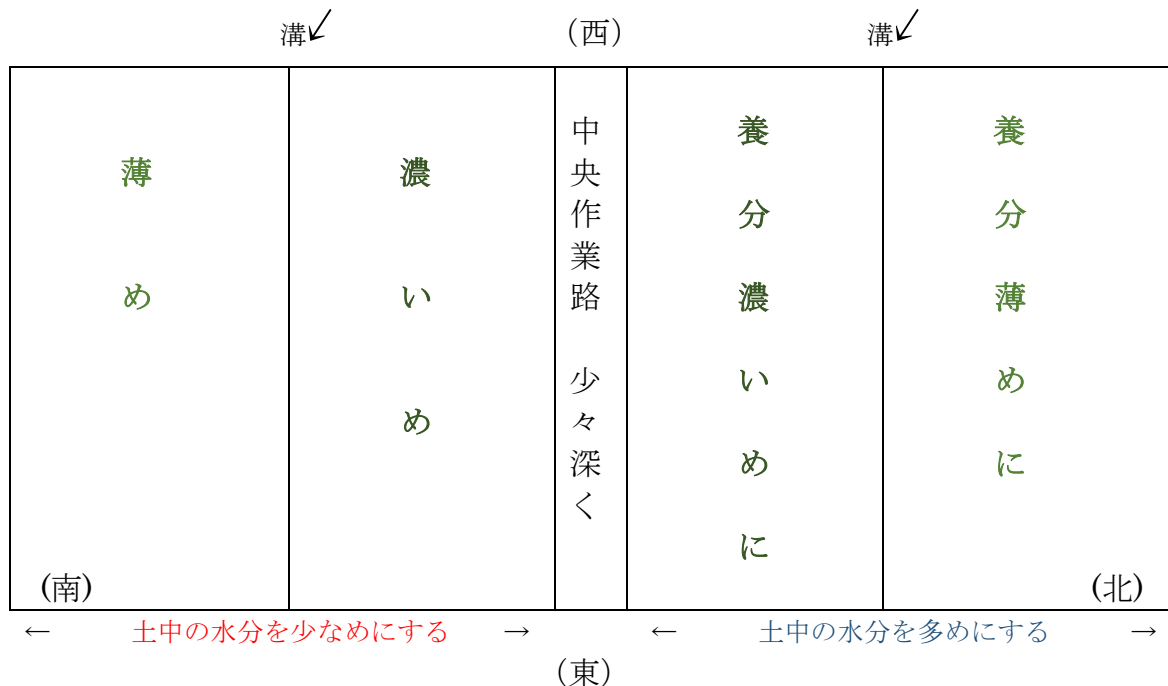
8/22 ナス元気

7/31 蔓物野菜のジャングル化

作付け畝の工夫 (完全有機肥・無農薬・不耕起栽培)

畝の周囲は堰板で囲む ⇒ 全体をやや高畝にする。

追肥用の深い溝、やや深く



長方形の耕作地を南北の横長としまして、中央部分に方向の作業路。排水を考えまして、少し深くする。作業路を挟んで南と北側に広幅の畝を作ります。

作業路に近い部分に養分の多い列。離れた半分に養分少な目の列。2つの列の間に追肥用の狭い幅の深い溝を用意します。

北側の広い幅の畝は、水分の多めな畝とします。南側の広畝は乾燥を好む野菜たちを植えます。

世界中からやってきた野菜たちを、原産地の気候・風土と、この畝の状態と合うように植え付けます。

この、「農園便り」の8月号で、説明した有機肥料を施します。後は水やり。

苗は自分で育成するのが良いのですが、実の所、「オザキフラワー」「芝勝」で仕入れることが多い。植えたら、それぞれの植穴から離して同じ野菜の種子も蒔きます。苗を買うと言うことは、時間を買うことでもありましょう。

やがて、購入した野菜が疲れ始めてきますので……。追いかけるように次の株が育ってきます。これで、収穫期間が長くなります。

北側の水分多めの広畝。作業通路。南側の乾燥気味の畝は、いずれも1m20cmぐらいの長さの堰板で囲んでやります。畝全体が、少々高くなるように作ります。

畝の上には、有機物(マメ科・イネ科の植物・笹など)で、マルチをする。植え列の、追肥用の深い溝に有機物を置く。どんどん入れる。積んでいく。畑の周辺に生えてくる草たちもどんどん置いていく。

「糠」を振る。有効な菌⇒「麹菌」「納豆菌」「乳酸菌」「酵母菌」等も撒く。身近に居る菌であります。手に入った時に振ればよい。

「糠」は多めに使いましょう。最後に、有機物の上に「板」を置く。オクオク・ラクラクの作業であります。「油粕」は、強い腐臭が出るので私は、使わない。

板は踏み圧から根を守る。板の下の生き物たちを紫外線から守る。

千葉県佐倉の専業有機栽培農家の「林農園」 (043-498-0389)

林重孝・初枝・宏之氏の家族農場である。水田は耕作希望者に任せて、野菜、果樹、養鶏を中心になさっている。慣行農法に疑問を抱き、完全有機栽培、完全循環農法を実践している。食品加工として、ミソ、醤油、ソース、ジャム、漬物、各種の農産物の缶詰を会員に提供している。

林さんの畑を見ますと、5～6町歩もあろうかと思われる広大な耕作地。その延々と続く「畝」が、私の提案する「畝づくり」とよく似ているのであります。

林氏の「畝」は、この号、1ページの図を延長した構造になっておりました。作業小屋から軽トラが豆粒の大きさに見通すほど広い畑。「健康・元気野菜」を作られている。NHK「やさいの時間」の指導メンバーとしても活躍している。

近くに「川村美術館」もありますので、「若竹シニア農園」の方々とツアーを組んで、訪ねてみようかと思ったことがある。現在、シニア若竹会の農園は廃園になっている……。

夏風邪で1週間。腰痛で、10日間、菜園は、お休み。

しばらく、動きがとれずに菜園に行くことが出来ませんでした。でも、上記の作付畝で、栽培しているせいでしょうか。野菜たちは元気でありました。

「土」中の生物たちに、感謝・感謝なのであります。生物たちと野菜達。この繋がりに感謝なのであります。「元気野菜」「健康野菜」たちが育っている。

耕作33区は、色々の「クモ」たちが走り回る。菜園は命が一杯である。

ガマカエルが、稲を植えたコンテナの脇に居る。3センチほどに育った焦げ茶色の(黒に近い)ものも居る。ジーンとして座っている。大きな方は焦げ茶と黄土色。さわやかな緑色の斑点も入っているのには、驚いた。多分、お隣の庭の住民であったのでありましょう。

近くに都立善福寺公園があります。そのせいか、鳥たちも色々やってきます。キジバト、ヒヨドリ、ムクドリ、オナガ、シジュウカラ、最近見かけなくなったスズメも……飛来する。有機・無農薬で野菜を作り続けておりますと、色んな生き物がやってくる。作業路に置いたコンテナの水面を見つけてトンボが、そして、食べ頃の昆虫をとらえにカマキリが、来る。

大島2中での4年間の島の生活が終わり、練馬区立大泉学園中学校、八坂中。杉並区は、東田中、中瀬中、松の木中。嘱託は、杉並区の宮前中。其の後、講師で、豊島区、小平市。渋谷区にも。学園中では英語の先生に『ユニーク教師』と揶揄された。「ユニーク」とは決して誉め言葉ではありません。解っています。私立中学は、聖学院中学校に3年間、お世話になりました。既に後期高齢者になっていた。何だか、履歴書めいてしまった…が…。

大島の学校の農場は大層広大でした。杉並区の中瀬中も300坪ぐらいはあったと思います。とにかく、雑草対策で大変でした。そこで、花を作り、花で埋める。宮前中学校では、農場管理用にミゼット、小型耕うん機などを入れた。花は、雑草の代わりに繁殖させました。沢山咲きましたので、荻窪で、関東バスの車内で配ったりしました。驚かれました。正に、「変人の領域」でありました。収穫した大豆で納豆を作って、呼びかけた先生に食べていただいたりも…、「おごり」で…。また、古畳で堆肥を作って、農場で使ったり…しました。全く、困ったもんだ。当時は、とにかく年中大変でしたが、今となっては楽しい思い出です。

島では、硫安、尿素、過リン酸石灰、塩化カリ・硫化カリ、配合化成…。いわゆる昭和の単肥の時代でした。有機肥料は人糞。鶏糞。兔の糞・尿、草木灰…。で、椎の葉や椿の葉、刈草、作物残渣…などで、人糞をたっぷりかけて、「腐葉土」を作りました。それはそれは、大変でした。野菜苗も自給でしたし…。とにかく…「人糞」は、よく使いましたヨ。島では「回虫」「蟯虫」が、多発性。昭和の30年代は、島の何処の村でも同じような状況であったと思います。「回虫」が、男便所の溜まりに這い回っていた。驚きでありました。当時、それが、普通の事でした…。

窒素分が過剰になると野菜たちに病虫害が多発する。 農薬 = 毒薬

それで、薬剤を良く使いました。 ハクサイ、キャベツ、小松菜が虫だらけ、穴だらけ。「DDT」「オルトラン」「スミチオン」・・・散布。「クロールピリン」という土壌消毒用の高価な新薬が飛ぶように売れた。買った。使った。

「水銀剤」「ヒ素剤」も出回った。色々の薬剤が製薬会社から提供された。買った。使った。だが、病気・虫の発生が止まらない。野菜たちは、ベトベト。白く「粉」で、覆われる。そこで、毒剤を使ったのであります。薬剤を撒いた。それでもも止まらない 害虫や病原菌たちが抵抗してくるので

す。「石灰硫黄合剤」は、自分で調合して良く使いました。「除草剤は」まだ出回っていない。バーナーで、野草を焼きました。

やがて、農薬が多種多量に撒かれ、「土」の生命は、死滅。「沈黙の世界」になる。体調を崩す方々が・・・。

当時の農業改善普及所の苦労は、大変だったであります。農薬の効き目の追求が仇となる。「健康被害」が多発したのであります。普及所の方々が倒れる。農家の方々が亡くなっていった。

できた野菜は、「不健康野菜」「有毒野菜」であります。 見たところ綺麗なのであります。与えられた化成肥料でおいしそうに育つ。でも、お味が淡泊。味も香も素っ気ないのであります。日持ちが悪い。葉の色が濃い。黒緑。舌に「ピリピリ」「苦」すぎる。硝酸塩。毒物なのであります。「健康野菜」・「元気野菜」とは、ほど遠いものであります・・・。「有毒野菜」になってしまった。栄養成分の少ない、見かけだけの野菜が売られている。

私がありがたがって使った薬剤は、今は使用禁止。

GA東京のサロン(学習会)、日比谷公園の公開講座で、元・農薬会社の方が、『希釈濃度さえ守っていただければ、これ程安心・安全で、使い易い物はありませんヨ』とおっしゃる。また、農家の方が、『正しい希釈濃度にするのが難しければ、家庭菜園用のスプレー缶を使えば、安全だヨ』と言う。果たしてそうであろうか。同じ農薬会社の方が、『使い古しの農薬は、畑の隅を掘って捨てればよい』などと恐ろしいことを言う。その程度の知識で農薬を売りまくっているのかと思うと、空恐ろしい。スーパーに、多種多様なスプレー缶が置かれ、手軽に売っている。よく売れている。

除草剤の「クサノン」。成分は「クリホサポート」。毒剤。この除草剤が、スーパーに、百円ショップにずらりと並んでいる。街道の街路樹が邪魔なので、高濃度の除草剤で、木を始末する自動車中古販売店もでてくる。そんな物がショップに置かれている。信じられない状況にある。

「有機・無農薬での野菜作り」にこだわって、「健康野菜」を作る毎日である。

T、